

山と僕たちを巡る話

北アルプスの最奥、黒部・雲ノ平での暮らしから垣間見える世界。来るべきオンシーズンに向けて、オフシーズンの間に準備しなければならぬこと。

第28話 「これからの話」

雲ノ平から下山して2カ月。今年
は寝ても覚めても、日常の二文字が
遠い。

気がつけばあたりではクリスマス
イルミネーションが明滅し、202
0年という迷宮のような季節に別れ
を告げるべく、人々が師走の街を忙
しなく行き交っている。

だが、多くの人がうつすらと感じ
始めているだろうが、コロナ禍はお
そらくそれ単体で終わるものではな
い。コロナ禍が引き金となり顕在化
した、自由経済や情報化、資本主義
民主主義、都市世界の脆さといった
社会課題は、20世紀が溜め込んだ壯
大な歪みともいべきもので、良く
も悪くも不可逆的に、僕たちを次な
る冒険の時代へと押し流して行くだ
ろう。ペストが大きな痛みとともに
中世の闇を清算したように、僕たち
は新しい時代の光を見出すことがで
きるだろうか。願わくばこの混沌を
エネルギーに転換して、希望のある
方向へと歩みを進めたい。

山の世界でも、コロナ禍によって
近年深刻化しつつあった山小屋事業
の持続可能性や国立公園の維持管理
に関する諸問題の危機感が急速に高
まり、登山業界および行政、メディ
アを巻き込んでさまざまな議論が始
まりつつある。

これまでは団結して意思表示をす

るようなことは極めて稀だった各地
域の山小屋組合も連携し、行政に対
してこの事態への対策(※1)を求
める動きを活性化させている。昨年
のヘリコプターの問題によって緊張
感が高まっていたこともあり、今回
ばかりは行政も本腰を入れて国立公
園の管理体制の見直しに取り組み姿
勢を見せている(※2)。

しかし、行政が対策に動けば早期
に事態は収拾するかといえば、過大
な期待はできない。なぜなら、コロ
ナ禍自体は駄目押しをしたにすぎず、
一連の問題の根幹ははるかに根深く、
長い期間にわたって蓄積してきた構
造的な問題に起因しているからであ
る。そして構造的な問題というのは
「金」の問題ではなく「人間」の問
題なのである。

そもそも日本の国立公園の管理体
制が脆弱なのは、歴史的に世論が自
然保護やアウトドアレクリエーショ
ンの公益性に関心を向けてこなかっ
たからだ。このことで国立公園を取
り巻く人材や予算が著しく不足し、
学術研究も低迷し、世論を喚起する
ための現状発信も欠乏している状況
であって、その空白のなかである種
の隙間産業的に発達したのが山小屋
だった。

見ようによっては社会の無関心が
山小屋の「なんでも屋」的な業態を

生み出したのであって、その山
小屋が困ったからといって、人
材不足の行政が肩代わりをでき
るわけではなく、コロナ禍によ
って多くの業種が疲弊している
なか、世論が直ちにこの問題を
社会的な責務として認識し、大
幅に予算を確保するということ
もないだろう。

また、万が一政治的な駆け引
きで予算だけは引っ張ってきた
としても、それを現状に即して
有効に配分できる人材や機関は
本当にいない。現状把握をしな
いままでは「使うこと」が目的
化すれば、俗にいうバラマキに
発展する。優先順位をつけられ
ず、問題の規模を測れないからであ
る。山小屋の経済支援ということ
を思い描いても、アクセスの良し悪し
規模、地域の人気、経営能力によっ
て山小屋の経営収支の在りようは千
差万別であって、もとより兼業でな
ければ成り立たない個人事業もあれ
ば、従業員を複数名抱える優良企業
もある。いかなる根拠、どうい
う水準で山小屋は維持されるべきな
のか、どこまでが個人の努力の問題で、ど
こまでが公共的な制度に委ねるべき
なのかを見極めるだけでも、膨大な
作業を要するだろう。

いまは新しい人材やアイデア、世



profile
伊藤二朗(いとう・じろう)
1981年、東京生まれ。雲ノ平山荘経
営者。幼少より黒部の源流で夏をすご
す。2002年に父・伊藤正一が経営す
る雲ノ平山荘の支配人になる。2010
年、日本の在来工法を用いた現在の雲
ノ平山荘の建設を主導し、完成させた

論をも巻き込んだ形のコミュニケー
ションの強化、複雑な知恵の輪を解
くような熟議、そして目的意識の共
有こそが必要なのだ。

これまでも書いてきたように(本
コラム13〜16話参照)、日本の国立
公園は特定の組織が絶対的な権限を
持つて管理する仕組みではなく「地
域性公園」といつて同一の土地に対
してさまざまな関係主体が混在し、
協働関係を築くことで管理して行く
という構図になっている。

となれば、関係者同士が関わるな
かで学び合い、相乗効果を高めて行
くようなコミュニケーションのあり

方こそが要となるはずだが、いまま
ではむしろ絵に書いたような縦割り
社会で、協力はおろか、組合ごと、
県や市町村ごと、省庁ごとの既得権
に捕われて、たがいに見て見ぬ振り
をするかのような関係性が支配的だ
った。協議会などを開いても、行政
側のメンバーに日常的に山の現場を
訪れる人材がほとんどおらず、めま
ぐるしく異動を繰り返す人事制度も
相まって、いつの間にか形骸化して
しまうという悪循環だった。そして
なにより、共有されるべき目的意識
が曖昧なのである。

いまは既存の関係者だけで内輪的
に責任の所在を議論する段階ではな
く、社会・世論と向き合いながら、
大きなムーブメントとして今後の世
界に「自然の価値」をどう位置づけ
直すことができるのかを考え始める
段階なのだ。

山小屋業界も、コロナがあろうが
なかろうが変わらなければいけない
時代になっていたことを思えば、ま
ずは自分から、山小屋という仕事の
可能性を最大限引き上げる努力をし
て世論を惹きつけ、ムーブメントの
原動力になっていかなければならな
いと思う。

今回は、今シーズンの経験から得
られた新しい山小屋のあり方の構想
などへと話を展開したい。

※1) 山小屋が担ってきた登山道整備などの業務の行政による直接的な関与、山小屋への各種支援など。※2) 北アルプスでは、登山インフラの維持管理に関わる多くの役割を民間事業者である山小屋が担ってきたために、山小屋の危機が国立公園の持続可能性にも直結してしまうというのがこの問題の背景